九州天皇家論
4章　仁徳天皇

小倉の恋の物語

放（さけ）つ島見ゆ

是（ここ）に天皇、其の黒日売（くろひめ）を恋ひたまひて、大后を欺（あざむ）きて、のりたまひしく、「淡路島を見むと欲（おも）ふ」とのりたまひて幸行（い）でましし時、淡路島に坐して、遙（はろばろ）に望（みさ）けて歌曰（うた）ひたまひしく、

おしてるや　難波（なにわ）の崎よ　出で立ちて　我が國見れば　淡（あわ）島
自凝（おのごろ）島　檳榔（あじまさ）の島も見ゆ　放つ（さけつ）島見ゆ

とうたいたまひき。乃ちその島より伝ひて、吉備國に幸行（い）でましき。

（古事記下巻　仁徳天皇）

仁徳天皇は、「大阪・難波」に居たとされる天皇である。仁徳天皇はご存じのように、高山に登って國を見ると、民家から煙りが出ていない。人々はご飯を炊くお米がないのだな、と気づいた天皇は、三年間無税とすると決めた。三年経って人々の暮らしは楽になり、後に、「聖（ひじり）の御世」と讃えられた天皇である。

天皇には奥方がいた。その奥方はなかなか愛情深く、亦、ゆえに嫉妬（しっと）深い人だった。その時、天皇には「黒日売（くろひめ）」という大好きな女性がいたのであるが、その女性は奥方の嫉妬を恐れて、故郷の「吉備」に帰ってしまった。「大阪」と「岡山」を結ぶ遠距離恋愛というわけである。

岡山県人としては興味をそそられる。

岡山県に仁徳天皇ほどの天皇を惚れさせる女性がいたのか。「黒日売（くろひめ）」と云うぐらいであるから、色は白く、黒髪の美しい女性だったのであろう。仁徳天皇は「黒日売」に逢いたくて逢いたくてたまらない。そこで「淡路島が見たい」と奥方を「欺（あざむ）きて」、「淡路島」に行き、そこから、遙か、「吉備」の國を見て歌を歌う。

おしてるや　難波（なにわ）の崎よ　出で立ちて　我が國見れば　淡（あわ）島
自凝（おのごろ）島　檳榔（あじまさ）の島も見ゆ　放つ（さけつ）島見ゆ

朝日に輝く難波の崎よ。ここに出かけて来て、我が國を見れば、淡島、自凝（おのごろ）島が見える。檳榔（あじまさ）の島も見える。放（さけ）つ島も見えることよ。

特別難しい歌ではない。仁徳天皇の國見の歌であるといえば、確かに國見の歌である。すんなりと理解できるはずなのであるが、どっこい、そうはいかないのである。「難波の崎」はどこか。この岬を、通常の解釈に従って、「兵庫県淡路島の北の岬」として見よう。問題は「放（さけ）つ島」である。これは、一体、どの島なのか、定まらない。古今の有名な研究者が様々述べている。代表的な研究者の考えを聞いてみよう。

古事記（日本文学大系）の頭注。注釈者は倉野憲司氏で、優れた研究者である。

「放つ島」とは「離れ島」の意に解してみた。武田博士は、さ食つ島、即ち食物の島の意で、淡路島のことだろうとしておられる。この歌には黒日売を恋う趣は見えない。それはこの歌はもともと国見の歌だからである。しかし物語歌としては、離れ島も見える、しかし黒日売の姿はどこにも見えない、の意を添えて解すべきであろう。

倉野憲司氏は「放（さけ）つ島」を「離れ島」と理解しているが、この「放つ島」がどの島か、特定は出来ていない。古代歌謡集（日本文学大系）の校注は土橋寛氏である。氏の注がある。

佐気都－名義・所在ともに不明
この歌の歌詞には、黒日売を思う意味はなく、淡路島で歌った趣もない。難波の崎から海上を見遙かした国見の歌であろう。（頭注53）

ここには、「名義・所在ともに不明」と書かれている。「難波の崎」から海上を見た国見の歌であるという解説はこの歌の解釈の難しさを表している。氏の解説に従って考察しよう。

①「難波の崎」は特定されていないが、「淡路嶋」のどこかの岬である。
②　歌を國見の歌とする。仁徳天皇の國は通常のように「難波（大阪）」である。

仁徳天皇は淡路島のどこかの岬に立っている。そして國を見た。國は東の方向に見える大阪である。しかし、淡路島の岬に立って東を見ても島影は見えない。淡路嶋と大阪の間の海には島が存在しないのである。仁徳天皇は確かに「淡島」、「自凝（おのごろ）島」、「檳榔（あじまさ）の島」、「放（さけ）つ島」の４つの島が見えると詠っている。ところが、大阪湾には島は一つもない。両氏の困惑ぶりを察することができる。

「放（さけ）つ島」

仁徳天皇が歌った「淡（あわ）島」、「自凝（おのごろ）島」、「檳榔（あじまさ）の島」、「放（さけ）つ島」はすべて島の名前である。それぞれの島には固有の名前が付けられており、当時の人々がよく知る島だったにちがいない。

「自凝（おのごろ）島」は伊邪那岐命、伊邪那美命が「天（あま）」から降って所帯を持った記念すべき島である。古事記には新婚の二人の絶妙な性問答がある。この時、「淡島」にも渡っている。この二つの島は天皇家ではよくよく知られた島だった。むろん、実在した。

「あじまさ」とは「蒲葵」であるという。この島には「蒲葵」がたくさん生えていたのであろう。「放つ島」とは一風変わった名前である。だが、当時、人が皆よく知る島だったと思われる。

仁徳天皇が最も詠いたかったのは「放つ島」である。だから、わざわざ最後に「放つ島も見えるぞ！」と力を込めて歌ったのである。「放つ島」とは「名も無き離れ島ではない」と解すべきである。

「吉備」が岡山とすれば方向が逆

仁徳天皇の國、「難波」は、通常、大阪と云われている。すると、仁徳天皇は「淡路島」の「難波の崎」に立って、「我が国見れば」と東の方、つまり、大阪の方をを見てこの歌を歌ったということになる。でも、「黒日売」が帰らされたのは「吉備」である。もし、「吉備」が岡山とすれば、そこは大阪から見て西である。当然、淡路嶋から見ても、岡山は西の方向である。恋しい女は西の方に居る。けれど、仁徳天皇は東の大阪の方を向いて「淡島が見えるぞ」「おのごろ島が見えるぞ」「あじまさの島が見えるぞ」「放つ島が見えるぞ！」と叫んだと云うのであろうか。恋しい人を思慕して歌うなら、当然、その方向を見て歌うのが人情というものであろう。西に恋しい人がいるのに、東を向いて「島が見えるぞ」と歌う人はいない。従ってこの歌は恋のうたではなく、國見の歌だと解釈されるのである。

「放（さけ）つ島」は兵庫県淡路島ではない

文学大系頭注8は「武田博士は、『さ食つ島』、即ち、食物の島の意で、淡路島のことだろうとしておられる。」と注釈している。

武田博士は「放つ島」を「さ食（け）つ島」と読み替えたというのである。だが、この読み替えは無理であろう。なるほど、「食」は「け」と読む。では、仁徳天皇は、「食物の島が見えるぞ！」と叫んだのであろうか。島を見て食物を連想するのは余程の事情であろう。仁徳天皇は、今、どこにいるのか。地の文は「淡路島に坐して」と書いている。仁徳天皇は、今、淡路島にいる。武田博士のように、「放つ嶋」が淡路島だと理解すれば、仁徳天皇は淡路島にいて、淡路島を見て「食物の島が見えるぞ」と叫んだことになる。このような「放つ島」の解釈は納得できるものではない。

作歌場所は「淡路嶋の難波の崎」

「この歌には黒日売を恋う趣は見えない。」というのが普通の解釈である。確かに、仁徳天皇の歌には「黒日売」について一言の言葉もない。しかし、古事記の地の文には、「黒日売（くろひめ）を恋ひたまひて」としっかり書いている。仁徳天皇は「黒日売」が恋しくてこの歌を歌ったのである。冷静に国見をするという精神状態ではないことは地の文であきらかであろう。

歌の中身は、「淡島」「オノゴロ島」「あじまさの島」「放つ島」と、仁徳は島を詠っているだけである。なぜ、仁徳天皇はこれらの島を順に歌ったのか。

この歌の作歌場所は明確である。地の文に「淡路嶋に坐して、遥（はろばろ）に望（みさ）けて歌曰（うた）ひたまひしく」と書いている。作歌場所は「淡路島」である。だが、「淡路島」と言っても広い。「淡路嶋」のどこか。

「おしてるや　難波（なにわ）の崎よ　出で立ちて　我が國見れば」と詠われている。仁徳は「淡路嶋」の「難波の崎」に出で立ちて、歌ったのである。歌の内的実証を尊重すればこのようになる。

今、仁徳天皇がいるのは、「淡路島の難波の崎」である。その岬から順に「淡島」、「オノゴロ島」、「あじまさの島」が見えた。そして、その三つの島の先に、問題の「放つ島」が存在していたのである。

なぜ、仁徳は歌の最後に「放つ島」を詠ったのか。「黒日売」が皇后の嫉妬によって帰らされたのは「吉備」と古事記の地の文は書いている。一見、「吉備」と仁徳の歌の「放つ島」は無関係に見える。従って解釈が分散してしまう結果となっている。少し考察してみよう。

(1)「黒日売」が帰らされた故郷は「吉備」である。
(2) 仁徳天皇は黒日売が恋しくてたまらない。
(3) 仁徳天皇は皇后を欺いて「淡路島」へ出かけた。
(4)「欺いた」のは「淡路島」に行ったことではない。「黒日売」に会いに行ったことである。
(5)「黒日売」は「吉備」に居る。
(6)「吉備」への行路は「乃ちその島より伝ひて、吉備國に幸行でましき」と書かれている。
(7) 仁徳天皇は３つの島を伝って最後に「放つ島」に渡った。

結論：「放つ島」に「吉備」が存在した。

この「吉備」を「岡山吉備」と解釈してはならない。「吉備」は「淡路島の難波の岬」から見える距離にあった「吉備」である。「黒日売」の故郷の「吉備」は「放つ島」に存在した。
仁徳は「黒日売」が帰った國、「吉備」の名を生々しく詠うわけにはいかなかった。「吉備」と詠えば、それは「黒日売」を詠うことになる。だから、「吉備」の代わりに、「吉備」の國がある「放つ島」を詠ったのである。
仁徳の歌は愛の歌である。歌は「放つ島」の「吉備」の「黒日売」に向かって放たれた。

「放つ島」が見える。島には「吉備」の國がある。その「吉備」に愛しい「黒日売」がいる。

「放（さけ）つ島」は名の如く「裂けた島」

さて、「放つ島」とはどの島か。明らかにできる。原文では、「佐気都志摩（さけつしま）」である。「さけつ」は「裂けつ」である。これは比喩ではなく、また、美称でもない。島の形態に由来する名前である。陸の一部が地殻変動か大地震が原因で、裂けて島になった、そのような島である。そのような島が存在すのであろうか。
仁徳天皇が恋に狂って、いい加減なことを詠ったのか。そうではない。この島は九州天皇家では誰でも知っている伝統の島である。兵庫県淡路島の北端に立って大阪方面にその「裂けつ島」はない。それどころか、大阪湾には島そのものがない。仁徳天皇が居たのは大阪・難波と考えている限り、この「放つ島」がどの島か金輪際わからない。でも、本来の作歌場所、仁徳天皇が実際に居た場所に立てば、自ずと明らかとなる。

(1)「淡路島」
「淡路島」は兵庫県淡路島ではない。九州天皇家の「淡路島」は現在の北九州市若松区である。古代、洞海湾は遠賀川と繋がっていた。若松区は島だった。イザナミ・イザナギの州産みに登場する「淡路島」は若松区である。
(2)「吉備」
神武天皇の時代、「吉備」と云われた國は岡山ではない。下関市彦島の西山町である。神武天皇が東征前、八年間居たという「吉備」とは彦島西山町である。「吉備」には神武天皇の妻の実家があった。九州天皇家において「吉備」と云えば、それは彦島西山町である。仁徳の歌もこの認識を踏まえている。
(3)「難波」
「難波」とは大阪湾の海ではない。九州天皇家における「難波」とは関門海峡である。この海は浪が速い。神武天皇が東征に出た時、この海を渡り、「浪が速い」といった故事に由来する。関門海峡は潮がまるで河のように流れる。潮は速い時は時速11ノットで流れるという。1ノットは時速1852mであるから、11ノットは時速約20kmとなる。この速さは世界トップのマラソンランナーの速度である。

(4) 「仁徳天皇」

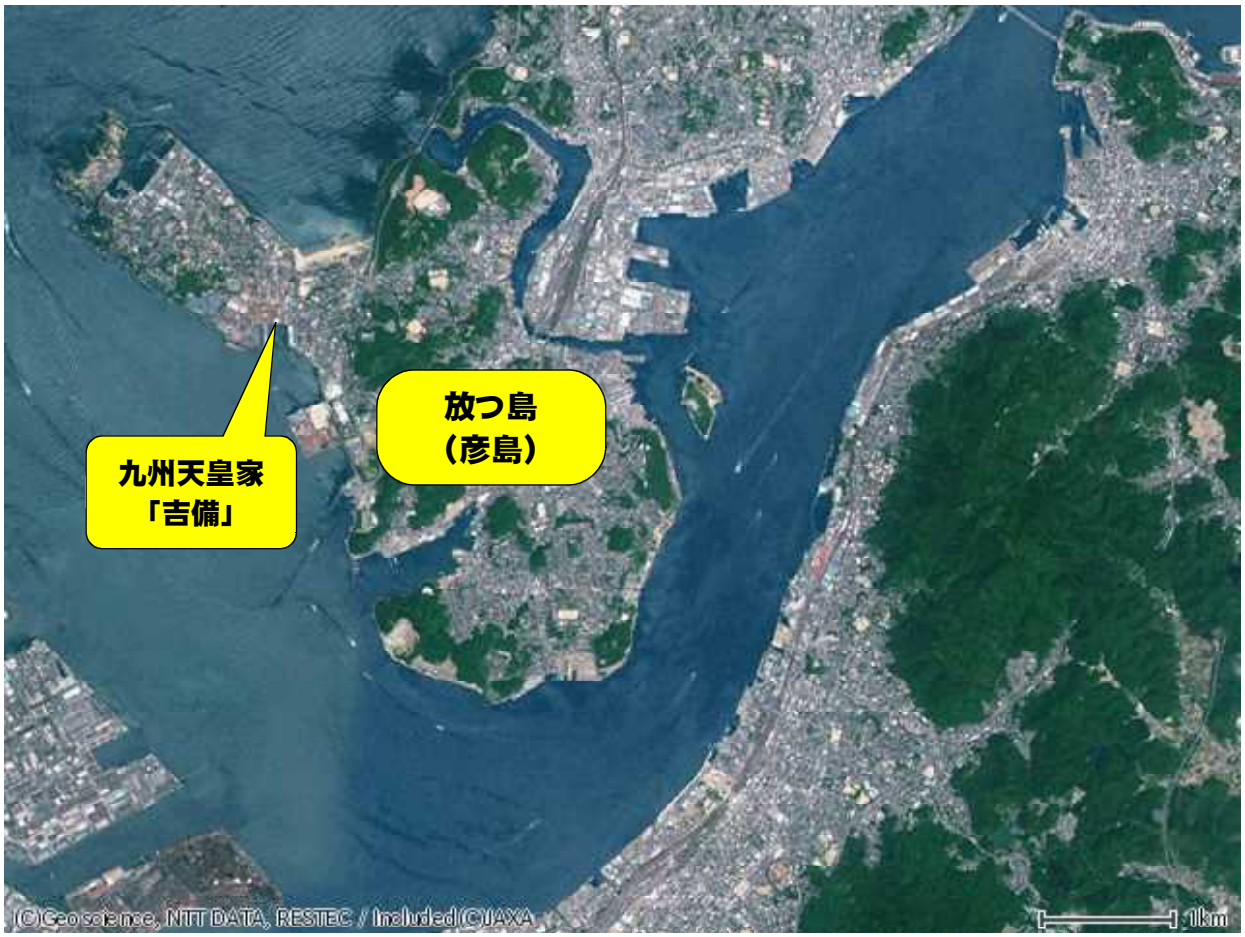
「仁徳天皇」は九州天皇家の天皇である。その國は大阪ではない。北九州市小倉である。小倉市はニニギ尊が降臨した「葦原中国」である。仁徳の宮はここに存在した。

(5) 「淡島」「自凝（おのごろ）島」「檳榔（あじまさ）の島」は小倉湾の島々である。この海がイザナギ・イザナミ國　生み神話舞台である。

(6) 「放つ島」

「放つ島」とは下関市彦島である。名の如く、写真の如く、「裂けた島」である。

神武天皇はここで兵を集めた。神武天皇は「磐余（イワレ）彦」という名である。その名の由来は神武天皇がここで兵を集めた時、「イワメリ（満ちた）」と言われる。ややこじつけであろう。「磐余（イワレ）」とは「磐割れ」である。もともと彦島は「磐余（イワレ）」と呼ばれていた。神武はここの出身である。よって「磐余（イワレ）彦」と呼ばれたのである。「イワレ」も「サケツ」も同義語である。彦島はその形状を見るまでもなく、「磐割れ」して、「裂けて」できた島である。



もう一度歌を読んでみよう。

おしてるや　難波（なにわ）の崎よ　出で立ちて　我が国見れば　淡（あわ）島
自凝（おのごろ）島　檳榔（あじまさ）の島も見ゆ　放つ（さけつ）島見ゆ

この歌は黒日売への恋のメールである。仁徳天皇が居たのは小倉北区の「高津宮」である。大好きな黒日売が「吉備」へ帰ってしまった。逢いに行きたい。が、皇后が許してくれない。

ハテ、ドウシヨウ・・・

思案にふけった仁徳天皇は、皇后に、『淡路島を見に行く』、と云って西へ行った。仁徳天皇夫妻が住んでいた「高津宮」から見ると、「淡路島」は西の方向であった。「黒日売」の住む「吉備」は東北

にあった。「西の淡路島へ出かけて行ったのなら、まさか黒日売に逢いに行ったのではあるまい。」
皇后は安心した。ところが、仁徳天皇は一枚上手だった。「西の淡路島」に行ったと見せかけて、実はそこから「東の吉備」の「黒日売」に会いに行ったのである。「西」と思わせて「東」へ・・・フェイントをかけたのである。

「淡路島」は「州生み」の「淡路島（若松区）」

仁徳天皇は「淡路島の難波の崎」に立って歌う。「淡路島」とは「州生み」の「淡路島」である。伊邪那岐命・伊邪那美命は「州生み」で最初に「淡路島」に国を造っている。国とは実質は弥生集落である。

では、その弥生集落は「淡路島」のどこに存在したのか。若松区「高塔山」である。伊邪那岐命は若松区の「高塔山」に最初の「州生み」をした。ちょうど、「高天原」が彦島老の山公園に存在した高地弥生集落であったと同じように、若松区・高塔山に高地弥生集落を作ったのである。以来、ここには九州天皇家にとって重要な宮が存在した。この宮には歴代がたびたび行幸した。仁徳天皇も同じように「淡路島の宮（高塔山）」に出かけたのである。

仁徳の父、応神天皇の記録が「淡路島風土記」に残っている。

> 淡路の國の風土記に云はく、應神天皇28年8月、天皇、淡路島に遊猟したまひし時、海の上に大きなる鹿浮かび来けり。則ち人なりき。天皇、左右を召して詔問はせたまふに、答へて白ししく、「我は是、日向の國諸縣君牛なり。角ある鹿を着たり。年老いて、與仕へまつらねども、尚も天恩を忘るることなく、よりて我が女、髪長姫を貢るなり」とまをしき。よりて御舟を榜がしめたまひき。之に因りて、此の湊を鹿子の湊と曰ふ。云々　（淡路島風土記）

同じ説話が古事記にある。

> 天皇、日向國の諸縣君の女、名は髪長比売、その顔容麗美しと聞し看して、使ひたまはむとして

喚上げたまひし時、其の太子大雀命、其の嬢子の難波津に泊てたるを見て、其の容姿の端正しきに感でて、即ち建内宿禰大臣に詔へて告りたまひけらく、「是の日向より喚上げたまひし髪長比売は、天皇の大御所に請ひ白し、吾に賜はしめよ」とのりたまひき。　（古事記）

應神天皇が「日向國の諸縣」の髪長姫を「喚上げ」した時の説話である。風土記では應神天皇が「淡路島」に行幸していた時、髪長姫の父、「諸縣君牛」が舟でわざわざやって来て、「娘を差し上げます」と云ったと記録している。その後、「其の嬢子の難波津に泊てたるを見て」と、姫が難波の津へ舟で送られて来た。この姫を仁徳が見初めて自分が欲しいと云う。これらの説話の「淡路島」とは若松区である。この「日向國の諸縣」も彦島に存在した縣である。

「難波（なにわ）の崎」

2008年夏、「難波の崎」へ行ってきました。そこは、現在、公園になっています。若戸大橋を渡って右折すると、自然に「高塔山公園」へ登っていく。古代はこの丘の麓まで海は来ていたでしょう。

仁徳天皇と同じように「高塔山公園」に立って東の方向を見ると、彦島が見えます。洞海湾は眼の下にあります。

淡（あわ）島　自凝（おのごろ）島　檳榔（あじまさ）の島も見ゆ　放つ（さけつ）島見ゆ

現在、小倉北区の湾岸、若松区の湾岸は埋め立てが進んでいる。仁徳天皇の時代には「高塔山公園」からは「淡（あわ）島」「自凝（おのごろ）島」「檳榔（あじまさ）の島」がみえたのであろう。

私が行った夏は視界が悪く、「佐気都志摩（彦島）」は霞んでいました。

「放（さけ）つ島見ゆ」

仁徳天皇の時代には、この「高塔山」に立つとこれらの島ははっきり見えたのであろう。最初に「淡島」、その向こうに「オノゴロ島」、その向こうに「あじまさの島」・・・。でも、まあ、そんな島は仁徳天皇にとって本当はどうでもいい。伊邪那岐命が最初に造った嶋は「自凝（おのごろ）島」である。「それがどうした。遠い先祖の話やろ。」「俺に関係あるかい！」　そんな島は素通りである。仁徳天皇の目に映っているのはその先の「放つ島」なのである。じゃあ、なぜこれらの島々を歌ったのか。

仁徳天皇は「難波の崎（高塔山）」に立って確認したのである。航路を。

あぁ、なるほど、そうか。まず「淡島」に渡って、それから「自凝（おのごろ）島」に渡ってと・・・

次は？「檳榔（あじまさ）」へ渡ったらいいか。ウン、ウン、そこから、「放つ島」に行くことができるか。

新航路（？）を発見した歓びでもって、力を込めて歌う。

淡（あわ）島　自凝（おのごろ）島　檳榔（あじまさ）の島も見ゆ　放つ（さけつ）島見ゆ

彦島と下関市は「小戸」という狭い水路によって隔てられている。彦島は、「裂けてできた島」である。この島に、九州天皇家の「吉備國」が存在した。その國へ「黒日売」は帰ってしまった。だから仁徳天皇は歌の最後に「放つ島」を詠った。

恋しいお前が帰った“放つ島”が見えるぞ！今、すぐ、逢いに行くぜ！

そして此の歌のように「島々」を伝って逢いに行った。何ともストレートな恋歌である。でも、こんな、あんなが重なって、遂に皇后は別居してしまう。そして皇后は死ぬまで仁徳天皇を許しませんでした。古代の恋もなかなか大変だったようである。

聡明な仁徳天皇、後の世の人に「聖（ひじり）の御代」とまで称えられた偉大な仁徳天皇ですら、こんな恋をしたのだと、おもしろおかしく九州天皇家の人々は伝えたのであろう。

以上、“若き仁徳天皇、小倉の恋の物語”でした。では、優しかった頃の妻の歌も紹介いたしましょう。

万葉86番歌
かくばかり　恋ひつつあらずは　高山の　磐根し枕きて　死なましものを

若い時の恋歌で、皇后がまだ実家の「葛城高宮」に居た時のものであろう。だが、万物は変化する。これが真実である。死んでしまいたいほど恋焦がれた恋心もやがて変わっていくものである。「高山」は「香山」とも書く。「高（こう）＝香（こう）」である。高山＝香山＝香具山で、「高山」とは香春町の香春一ノ岳である。

万葉87番歌
ありつつも　君をば待たむ　打ち靡く　わが黒髪に　霜の置くまでに

万葉88番歌
秋の田の　穂の上に霧らふ　朝霞　何処辺の方に　わが恋ひやまむ

いずれも一途な恋の歌である。二人はかくして結ばれて、かくして破局を迎えました。では、次に破局の歌も読んでみましょう。